

## I 小墾田宮跡推定地および豊浦寺跡の調査

### 1 小墾田宮跡推定地 第1図 昭和45年5月20～11月11日

593年豊浦宮に即位した日本最初の女帝推古は、603年に小墾田宮に遷り、628年崩するまでの20余年間そこを皇居とした。推古天皇の死後、皇居は飛鳥の地を転々とする。しかし皇極天皇は即位の年（642）板蓋宮に遷るまでのしばしの間小墾田宮（一説に、東宮の南庭の権宮とある）にあったとする記録があり、これは推古天皇の旧宮かとされている。その後、655年（齊明元年）小墾田に瓦葺の宮殿の造営が計画されるが、完成はみなかつたらしい。それから100余年経た奈良時代の765年（天平神護元年）称徳天皇は紀伊行幸の途次、大和国高市郡小治田宮に至るとあり、続日本紀はその前5年間に数度小治田宮関係の記録をとどめている。以上の記録にあらわれた小墾（治）田宮が全て同一同所であるとする確かな根拠は乏しい。しかし小墾田の地に長い間宮殿が設けられたことを物語るものと言えよう。

小墾田宮の所在地に関しては、従来、飛鳥岡本宮と同所、すなわち雷丘東方の地に推定する説、あるいは現在の明日香村豊浦の西念寺周辺とする説などもあったが、今回発掘調査した豊浦北方と檍原市和田とにまたがる地が有力である。推定の主な根拠は、①蘇我稻目の小墾田家・向原家に仏像を安置したといい、それが豊浦寺の前身であると考えられること、あるいは日本書紀の朱鳥元年に五寺の一として、「小墾田豊浦寺」をあげていることなどから、小墾田は豊浦寺の近く、すなわち現在の豊浦近傍に考えられること、②小字名に「古宮」という名称をとどめていること。ここに建物の基壇かとみられる土壇が現存し、古瓦の散布が認められること、③「古宮」土壇の近くの水田下から、明治11年に金銅製四耳壺が出土していること、④付近の水田地帯は、東西・南北300m四方程の範囲が周囲より一段と高い平坦地となっており、古代の宮殿が立地するのにふさわしい地形を示していること、などがあげられている。しかしこれまでこの地域においては発掘調査もなく、顯著な遺構が発見されたこともな

かった。文献上の解釈を主とし、若干の出土遺物や地形に基づく以上の推定も、確かな根拠とはいいがたかった。

発掘調査は、「古宮」土壇の周辺において実施した（発掘面積20a）。ここはすでに述べた平坦地の東南部にあたり、付近の水田はとくに水もちが軽いといわれていた。発掘の結果、庭園・石組溝・掘立柱建物・素掘りの溝などの遺構を検出した。以下その概要を紹介する。

この地域の旧地形にはかなりの起伏があって、造営に先立って地ならしが行われており、東西130m、南北100mに及ぶ調査地のほぼ全域でみられ、大規模かつ広範囲なものである。整地土には縄文時代から古墳時代の遺物を多量に包含しており、5世紀後半以降6世紀代の土師器・須恵器が特に顕著であった。これはこの付近が早くから開発されていたことを物語るものであろう。

「古宮」土壇の南方約40m、すなわち発掘地の南はずれでは、南東より北西へ流れる大溝SD050を検出した。まっすぐに45m以上伸びており、その走行は東西に対し西で北に約20度のふれをもっている。幅1.5～1.8m、深さ40～60cm、両側には20～50cm大の河原石を2～3段積みあげている。3回ほどつくりなおした痕跡があり、また、堆積土の状況をみると、かなりの流水があったらしく、主要な排水路とみることができる。堆積層から7世紀前半の土師器や須恵器が多量に出土している。広嚴寺（向原寺）周辺で発見された建物跡の軸線は真北に対し北で18～20度西にふっている。これは条里制以前の古い地割りに関連するとされているが、それと異なった溝の走行には興味がもたれる。

この大溝の北側を中心にして小規模な庭園遺構を検出した。庭園は池と玉石溝、そのまわりの石だたみなどよりなっている。玉石溝SD060は、大溝SD050を埋め立てて作っており、使用年代は大溝より新しい。池SG070は拳大から人頭大の河原石を深さ50cmほどの摺鉢状に敷きならべて、東西2.8m、南北2.4mの橢円形状に造っている。ぐるりには特に大きめの石を用いている。西半部は破壊されて玉石は認められない。玉石溝SD060は幅25cm、深さ20cm程で、側には河原石をたてならべ、底に河原石を敷いている。SD050との

交叉点以南では底石もなく、側石の積み方も貧弱になっている。池SG070から西南方に流れ、3m程で南に曲り、SD050との交叉点でふたたび西南に折れ、そのまま発掘地の西南方にのびている。全体にゆるやかなカーブを描き、延長約25m以上に達する。石だたみSX065は10~20cm大の河原石を使用している。ごく小範囲にしか残っていなかったが、周囲には河原石が夥しく散乱しており、本来はより広範囲にあったものと考えられる。SG070・SD060から出土した土師器・須恵器・埴からみると、この庭園は7世紀の中頃に廃棄されたものと考えられる。埴は、単弁八葉蓮華文のある飾埴で、百濟出土のものと類似している。わが国初見の珍しいものである。

園池のまわりには、掘立柱建物の柱穴と思われる遺構があった。小範囲の調査のためにそのほとんどの規模や構造を確認できなかつたが、数棟あることは確かである。そのうち池SG070の北方20m、かって金銅製四耳壺が出土したと伝えられる付近でみつかった東西建物SB085は、3間×6間（桁行柱間2.8m・梁間柱間1.8m）をはかる。

このほかにも発掘地の各所で素掘りの溝や掘立柱穴を検出している。トレンチ発掘を主としたため、性格や規模についてはつかみ得ていない。しかし、これらの中には明らかに飛鳥時代に作られたものがあり、注目される。

飛鳥時代以降の遺構も認められる。「古宮」土壇を囲む地に幅3mほどの溝SD090が、南北35m、東西40mの方形にめぐっている。中世のものと考えられる。また、「古宮」土壇の中央部には石積みがあった。その精査は今後に残したが、出土遺物からみて明らかに近世以降作られたものである。これによって古い建物跡とする根拠はなくなった。

以上の事実と、瓦がほとんど出土しない点などをあわせ考えると、今回調査した地域は寺院跡とみるよりも宮跡の可能性が大きいと言えよう。しかも、大溝と庭園遺構との重複に認められるように、すくなくとも二次にわたる造営が考えられる。そして、それらの年代は7世紀前半と推定できる。それは日本書紀などにみる小墾田宮関係の記載内容とよく符合する。

今回の調査で広範囲に遺構の存在することがはっきりした。今後の発掘に大

きな期待がもたれる。

## 2 豊浦寺跡 第2図 昭和45年12月14日～25日

明日香村豊浦74-1番地の水田の宅地転用にともなう緊急調査として実施したものである。この水田は広巖寺本堂の北方50m、先に調査した小墾田宮跡堆定地に隣接しており、その古宮土壇と通称される小さな土壇は、ここから北150mほどのところにある。小墾田宮・豊浦宮・豊浦寺の関連を知るうえで重要な地点と考えられた。これまでに豊浦寺跡の発掘調査は、奈良県によって、広巖寺本堂前庭・同寺境内南側・豊浦宮跡礎石付近で行われており、遺構を発見している。

今回の調査は小範囲（発掘面積1a）に限られており、発見した主な遺構は、発掘地区西北ではほぼ南北にならぶ石列SX165、南端の石敷SX160のほか、近世の遺構である発掘地区中央部の土塙SK161、この土塙を埋めた後に掘られた南北溝SD162などにとどまった。

石列SX165は長さ30cmほどの石を1列にならべたもので、東側を面としていた。基壇化粧の一部ともみられるが、あるいは単に砂止めのような施設かも知れない。この石列の方位は、広巖寺本堂やその前庭の遺構とほぼ一致し、真北に対し西へ18度ほど傾いている。石敷SX160は握拳大の小石を敷きならべたものであるが、北と西側は後世の土塙や溝によって破壊されており、南と東側は発掘区域外に続き、その範囲を確かめることができず、また性格も明らかにはならなかった。土塙SK162は瓦礫を捨てた大きなもので、このなかに礎石とみられる石が3箇あった。また、瓦類は飛鳥時代から室町時代に属するものがあり、土器も近世のものにまでおよんでおり、埋めた時期を近世とすることができる。

以上の調査により、この水田は、近世まで寺の境内であったことが明らかである。瓦礫を捨てた土塙の存在やこの付近の地形などから判断すると、この水田は境内の西北隅に近い位置にあり、石列SX165はその境界となる施設かも知れない。